

学 位 論 文 要 旨

氏 名 大島 崇行

題 目 授業観察実習におけるリフレクションに関する研究

学位論文要旨（和文2,000字又は英文1,000語程度）

新人教員の大量採用や社会の複雑化などにより、養成・採用・研修の一体化が叫ばれ、とりわけ教員養成には、即戦力としての実践力育成が期待されている。一方で、教師生活全体をかけて形成させる教師の専門性についての議論は十分とは言えない。「学び続ける教員像」を実現するには、即戦力としての実践力育成のみならず、教師の専門性の基礎養成をも志向する実習が行われる必要がある。そこで、本研究では教師の専門性を「省察的实践家」としての教師を中心に据え、その省察の中でもとりわけ、「ダブル・ヴィジョン」（ショーン、2007）での省察を行うことに着目する。

大学での教員養成では1990年代以降、教育課程外も含め学校現場での実習が増加した。その中でも、授業観察の実習は多く行われており、重視されている。また、実習では、指導者に当たる指導教諭との関係性の中で実習生が成長していくとされており、指導にあたる教師が実習をどのように捉え、どのように指導するのが実習生の成長に影響を及ぼす。一方で、学校現場における指導教諭の選定は教師教育者としての視点では選ばれてはいない（中田、2014）ように、日本においては教師教育者という考え方は定着していない（武田、2014）。また、どのように実習を行うかについては指導教諭に委ねられており、その実態は「ブラックボックス化」（藤枝、2001）しているため、指導教諭と実習生がどのような実習を行い、実習生がどのような省察をしているのかについてはほとんど検討されてこなかった。

そこで、本研究では教師としての即戦力となる力量形成とともに、長期的な視点での成長を目指し、メンターとなる熟練教師とメンティーとなる学生との間で行う授業観察リフレクション実習のプログラムを開発し、そして、開発したプログラムによる実践を事例的に評価した。この評価により、開発した事例におけるプログラムの有効性の検証と、本研究の研究結果による「移設可能性」（関口、2013）について考察することを目的とする。

第2章では、複数回の授業観察とそのリフレクションを俯瞰する総括的リフレクションを取り入れた授業観察リフレクションの実習プログラムを開発した。そして、大学生による実習を事例的に分析し、その実習における有効性を明らかにした。本調査で開発した授業観察リフレクシ

ンと総括リフレクションでは省察の内容が異なっており、授業観察リフレクションでは、観察した授業に関する具体的な省察が行われ、総括リフレクションでは自身の観察を俯瞰し、分析するダブル・ヴィジョンでの省察が行われた。また、大学生自身も観察の変容を認知し成長を実感したこと、自身の観察の枠組に気づき観察の枠組を拡張していこうという意味が示され、実習生がこの実習プログラムの効果を感じていたことが明らかになった。

第3章では、メンターとメンティーが行う授業観察リフレクション実習を開発した。そして、大学生と現職大学院生による実習を分析し、その実習における有効性を明らかにした。大学生と現職院生が協働する授業観察リフレクション実習を通し、大学生は自身のもつ評価観の枠組みを再考し、その後の観察を再構築していった。その要因として現職院生との関わりと観察の可視化が挙げられる。開発した実習は、大学生が自由に意見を表出する場を確保（「観察語り」）しており、ICTの活用により観察を可視化したものであった。それにより、大学生と現職院生との観察の差異が明瞭となった。そして、その差異から大学生が気付きを得たり、現職院生に進んで質問したりするなど自ら学ぶ姿勢をもち、形成的評価のレポーターを拡充し、ダブル・ヴィジョンでの省察を行っていた。また、大学生自身も授業の様々な現象に対して新たな意味付けを行えるようになったと感じ取っており、この授業観察リフレクションをすることで授業観察力が向上したと認知していることが明らかになった。

研究方法に記述した通り、本研究の研究結果は開発した実習プログラムの有効性を一般化するものではなく、どの実習現場でも同等の結果を保証するものではない。しかし、本研究におけるプログラム設計思想である＜観察を可視化し俯瞰する設計＞、＜観察を可視化し比較する設計＞、＜観察表出保証の設計＞を取り入れた観察実習プログラムを、各現場に合わせて実施することにより、その効果を得ることができると考える。これらの設計思想は教育実習に限らず入職後の初任者研修や様々な研修に取り入れてプログラムを行うことも考えられ、それにより本研究結果の「移設可能性」が示されると考える。